

### 上代の〈～ゴト（シ）〉

村島, 祥子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

70

(開始ページ / Start Page)

25

(終了ページ / End Page)

32

(発行年 / Year)

2004-07

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009936>

## 上代のくゝゴト(シ)〈

## 一 問題の所在

上代で直喩をつくる言葉には、くゝナスくゝゴト(シ)くゝジモノくゝへーモコロくゝなどいくつか見られるが、代表はくゝナスくゝとへーゴト(シ)くゝであろう。

- (1) …波のむた か寄りかく寄る 玉藻なす【玉藻成】  
寄り寝し妹を 露霜の 置きてし来れば…(2…)
  - (2) さ寝らくは玉の緒ばかり恋ふらくは富士の高嶺の鳴沢のごと【奈流佐波能其登】(14…)
  - (3) 逢へらくは玉の緒しけや恋ふらくは富士の高嶺に降る雪なすも【布流由伎奈須毛】(14…)
- (1)は妹と共寝する様を玉藻に、(2)は恋心の甚だしさを鳴沢に、(3)は恋心の甚だしさを降雪に、それぞれ喩えている。くゝナスくゝとへーゴト(シ)くゝはこのように直喩をつくる。(1)は同

## 村島 祥子

作家である人麻呂の別作品に「(4)…臥やせば川藻のごとく【川藻之如久】なびかひの宜しき君が…(2…)」とあり、共寝を藻に喩える同様の直喩にくゝゴト(シ)くゝが用いられている。また、(3)は(2)の異伝である。多少語句が入れ替わっているが、恋しさが募ることを喩えている点では、(2)「鳴沢のごと」も(3)「降る雪なすも」も同じである。このように直喩をつくる働きにおいて、くゝナスくゝとへーゴト(シ)くゝには重なる部分がある。

しかし、くゝゴト(シ)くゝが中古以降も直喩をつくる語として残っていくのに対し、直喩をつくるくゝナスくゝは上代限りで見られなくなる。中古のくゝゴト(シ)くゝは専ら漢文脈で用いられ、和文脈ではくゝヤウナリくゝが使われるようになるといった変化はあるものの、その後かなり文語的ではあるが、くゝゴト(シ)くゝは現代でも直喩をつくる語として通じている。つまり、直喩をつくる方法としては、くゝナスくゝは上代限りで消え、くゝ

ゴト(シ)は中古以降も長く生き残ったと言える。このよう  
なへーゴト(シ)とへーナスが共存していた上代の直喩は  
どのようなあり様であったのか、またへーゴト(シ)とへー  
ナスの違いは何か、さらになぜへーゴト(シ)が残りへー  
ナスが減びることになったのかといった諸々の疑問を明らか  
にするために、本稿ではまず上代のへーゴト(シ)を取り上  
げ、その成り立ちと仕組みについて考察する。

## 二 へーゴト(シ)の成り立ち

上代のへーゴト(シ)は次のような直喩をつくる。

(5) 新室の壁草刈りにいましたまはね 草のごと【草如】  
寄り合ふ娘子は君がまにまに (11:35)

(6) 飛び翔る すがるのごとき【為軽如来】 腰細に  
取り飾らひ (16:35)

(5)は娘子が寄り合う様子を「草」に、(6)は若かりし日の華  
奢な腰つきを「すがる」という蜂に、それぞれ喩えている。

しかし、周知のように、へーゴト(シ)は直喩専用の語では  
ない。

(7) 聞きしごと【如聞】まこと貴く奇しくも神さびをるか  
これの水鳥 (3:45)

(8) 梅の花今咲けること【伊麻佐家留期等】散り過ぎず我  
が家の園にありこせぬかも (5:8)

(7)は聞いていたとおり水鳥が奇しく尊いあり様であったと  
感動している歌である。この「ごと」は前評判と実景が一致し

ていたことを表しており、このような例は一般に比喩とは見な  
さない。(8)は宴席で美しく咲いている花と同じように、自宅  
の庭の花も咲いていてほしいと願っている歌であるが、これも  
比喩ではない。(7)(8)のようなへーゴト(シ)の用法を本稿で  
は「参照」と呼ぶことにする。このように、へーゴト(シ)は  
直喩をつくるが直喩専用の語ではなく、「直喩」と「参照」を  
合わせた比況と呼ばれる働きを持っている。このようなへー  
ゴト(シ)がつくる直喩の仕組みを捉えるには、やはりへー  
ゴト(シ)の成り立ちを考える必要があるだろう。以下へー  
ゴト(シ)の語源について、諸説を適宜取り上げながら考察す  
る。

一般に比況の助動詞と呼ばれるへーゴト(シ)は、連体助  
詞を伴って「へーゴトシ」「へーガゴトシ」のように用られる。  
また、上代では(5)(7)(8)のように語尾を伴わずに語幹ゴトのみ  
で用いられることが多い。これらの特徴から、へーゴト(シ)  
は名詞ゴトが後に形容詞語尾シを獲得して助動詞化したものと  
考えられている。このゴトの語源は「事(言)」に求める説が  
有力であり、古くは三矢重松『高等日本文法』(明治四一)が  
へーゴト(シ)は名詞「事」に接尾語的な「し」がついたもの  
と述べている。だが、へーゴト(シ)と「事(言)」をどのよ  
うに関係づけるかについては様々な理解が行われてきた。橋本  
進吉(一九五二)『上代語の研究』もへーゴト(シ)の語源を  
「事(言)」とするが、「こと放けば(7:40)」などの条件句  
でのみ用いられる「ゴト(へーバ)」とへーゴト(シ)がいずれ  
も「同様に・同様だ」という意であると論じる筋道には従えな

い。元は同源であつても、すでに呼応を持ち副詞化の著しい「コト(ゝバ)」のコトと、すでに連濁し付属語化しつつあるへゝゴト(シ)ゝのゴトの、どちらにも当てはまる現代語訳を探すが、(7)がへゝゴト(シ)ゝの原義を求める有効な手段であるとは考えがたい。また、山口佳紀(一九八二「ゴト(如)」の意味―比況へゝゴト(シ)ゝの成立―『国語国文』51巻10号)が指摘するように、「コト(ゝバ)」が同一の意を持つのであれば、コトの表記に【殊】【別】という字が用いられているのも意味から考えて不審である。さらに、へゝゴト(シ)ゝには別のものではない同一のものを指した例がない。例えば、現代語の「同じ」「同一」という語には、①同一である・別のものではない、②性質・状態・程度などが共通している・差異がない、という二つの意味がある。①は二つのものが本当に同じ一つのものであるという意であり(例えば「私と彼は学年が同じだ。」「会計と書記は同じ人が兼ねている。」、②は二つの異なるものが同一の性質を持つている(例えば「私は父親の好みと同じだ。」「右に同じ。)」という意である。「同じ・同一」の意をもつ語にこのような二つの意味が生じるのは自然であろう。ところが、へゝゴト(シ)ゝは専ら②で用いられ、①のように用いられた例がない。現代語の例を参考にしても、②は「父親の好みノゴトシ。」「右ノゴトシ。」と言ひ換えて意味が通じそうなのに対して、①の「学年が同じだ」「同じ人が兼ねている」はへゝゴト(シ)ゝを用いて言ひ換えられそうにない。へ直喩である(5)(6)は当然②であり、へ参照である(7)(8)も②の用法である。(8)は前評判と実景という二つの異なるものが同じであるか、(8)

はよその家の梅と我が家の梅の開花状況が同じであるか、である。上代のへゝゴト(シ)ゝが同一人物や同一の事物を指した例は見あたらない。へゝゴト(シ)ゝが「同じ・同一」の意であれば当然生じると考えられる①の用法を欠いている点においても、橋本説は疑わしい。

同じくへゝゴト(シ)ゝの源を「事(言)」としながら独自の論を展開する説もある。山口堯二(一九七八)「ことめでは」「ことならば」考―コト(事)の暗示性―(『論集日本文学・日本語 1上代』)は、「事」は「物事の起こるべくして起こる定めや現れ」を表し、そこから生じたゴト(如)による比喩は本来「外面よりも本性本質の一致」を表したと論じる。だが、「事」のもつ「内面からその現象を規定しているそれ固有の本性本質としての意味合い」をへゝゴト(シ)ゝにそのまま当てはめる筋道は疑問である。確かに抽象名詞「事」は広い意味領域を有しており、超越的な定めや現れといった意味合いで用いられることがあつたことは否定しないが、そうした「事」の一面がそのままへゝゴト(シ)ゝに受け継がれているか確かめるためには別の手続きが必要であろう。

名詞「事」からへゝゴト(シ)ゝへの流れについては、対象を抽象化して指示する抽象名詞「事(言)」の働きに着目した説明が適当であると考えられる。吉田金彦(一九七三)『上代語助動詞の史的研究』(一九七七)『国語意味史序説』は、「経験の対象たる事物の事やその事を記号化する言」が「物事を指示するところ」に比喩の根元的本義がある」と述べ、さらに「こと」は上語と一体になって広義の名詞的連語を構成するも

のである。「形式的には「こと」止めの喚体文をなしており、それに「し」が加わることによって説明体の述体文に転じているものである」と述べた理解に首肯される。同じ方向から『角川古語大辞典』は、「こと」は「事」で、物や事実の性質を事として抽象化することで、同一化・同等化が行われたもので、例えば「月の円いことは盆の円いことである」の関係を「月盆のごとし」というようになったものであろう。」と簡易に説明している。『角川』の説明にあるような、「(ノ)コト、:。」という構文で「:」を「ノ」に喩えているコト(事・言)の用例が上代には見あたらないが、例えば次のようなコト(事・言)がそれに近いものであろう。

(9) 八田の 一本菅は 子持たず 立ちか荒れなむ 惜ら  
菅原 こと【許登】をこそ 菅原と言はめ 惜ら清し  
女(記六)

(9)は一本菅が子株をつくらずそのまま立ち枯れるであろうことが惜しいと書き起し、そこから後半では美しい娘が子を持たずに年頃を過ぎていくことの惜しさへとつなげている。初めの「一本菅」と後の「清し女」をつないでいるのが「ことをこそ菅原と言はめ」である。この句によって、初めに「一本菅」について述べたがそれは「こと」として言ったのであり、本題は実は「清し女」のことであったことが分かる。この「こと」は「一本菅」と「清し女」が喩えるものゝと喩えられるものゝの関係であることを知らせ、その中で「一本菅」のほうが喩えるものゝであることを明示しつつ、喩えられるものゝすなわち本題「清し女」が別にあることを暗示する役目をも果た

している。このような「こと」の働きは、例えば「一本菅のゴト(ク)、清し女(は子持たず)」「一本菅のゴトキ清し女」のように用いられるへゴト(シ)の働きと近似し、へ直喩である(5)(6)に通じていると見ることができると。さらに、へゴト(シ)がこのようなコト(事・言)に由来しているとすれば、へゴト(シ)が既述の「①別のものでない・同一のもの」の用法を欠いているのは当然である。言うまでもなく、喩えられるものゝと喩えるものゝが「別のものでない・同じもの」では比喩は成立しない。へゴト(シ)が「別のものでない・同一のもの」を表さないのは、喩える対象を示す働きを持ったコト(事・言)に由来しているためであると考えられる。そして、コト(事・言)が喩えるものゝを明示する働きを持ち得たのは、「事」が事物を抽象化する働きを持つていたためである。喩えるものゝを抽象名詞コト(事・言)によって一括りに対象化し、本題である喩えられるものゝに対置・置換させることによって、両者の共通点と相違点を同時に浮かび上げられせ比喩を成立させていたと推測される。これは物事を相対的に把握しがちな私達の認識のあり方にも適っている。「(ノ)コト、:。」「:」(ハ)、(ノ)コト。」という構文で比喩をつくっているコト(事・言)の例を上代に見つけることはできないが、へゴト(シ)が完全に連濁していることから見て、こうした構文で用いられていたコト(事・言)は上代ではすでにゴトとして付属語化してしまっていたと考えられる。

## 三 へゝゴト(シ)ゝの仕組み

一般に助動詞と分類されるへゝゴト(シ)ゝは、助動詞らしくない用いられ方をすることで知られている。その特徴として、①助動詞は助詞をうけることはないが、へゝゴト(シ)ゝは連体助詞ノ・ガをうけて「ノゴト(シ)ゝ」「ガゴト(シ)ゝ」のように用いられる(5)(6)、②上代では語幹ゴトを単独で用いた例が多い(5)(7)(8)、③ゴトを単独で用いた場合は連用格に立つ、の三点が挙げられよう。既述のように、特徴①②はゴトが名詞に由来するためであると考えられる。問題は特徴③である。例えば、(5)「草のごと」は「寄り合ふ」という動詞を、(7)「聞きしごと」は「貴く奇しく」という形容詞を、それぞれ連用修飾する連用格である。以下、へゝゴト(シ)ゝは語幹用法になるとなぜ連用格に限られるのか考察することを通して、へゝゴト(シ)ゝがつくる直喩の仕組みを推定する。

周知のように、比況の根底には比較の構造がある。言い換えれば、比喩が成り立つためには、へ喩えられるもの(＝本題)ゝとへ喩えるものゝを比較して共通点を見つける必要がある。説明の便宜上、本題であるへ喩えられるものゝをX、本題Xをより明らかに把握するためにもちだされてきたへ喩えるものゝをYと呼び、へ直喩ゝの用法に限って話を進めていく。

へゝゴト(シ)ゝが名詞「事」に由来するならば、当初XとYは「X」と「Y(ノ)事」というむき出しの体言どうしであったことになる。ところで上代の古い時期には、体・用言にかか

わらず、XとYをただ並べただけの比喩が散見される。

- (10)  $\overset{y}{Y}$ あめ鶴鶴 千鳥真鴉 何 $\overset{x}{X}$ ぞ黥ける利目(記一七)
- (11)  $\overset{y}{Y}$ ぬばたまの 黒き御衣を ま具さに 取り装ひ  $\overset{y}{Y}$ 沖 $\overset{x}{X}$ つ鳥  $\overset{x}{X}$ 胸見る時…(記四)
- (12) 誉田の 日の御子 大雀 大雀  $\overset{x}{X}$ 佩かせる太刀 本吊ぎ 末振ゆ  $\overset{y}{Y}$ 冬木の 素幹が下木の さやさや(記四七)
- (13) …泣かじとは 汝は言ふとも  $\overset{y}{Y}$ やまとの 一本薄 $\overset{x}{X}$ 項傾し 汝が泣かさまく…(記四)

(10)はXYともに体言、(11)(13)はXが用言でYは体言、(12)はXYともに節である(「さやさや」の後に「振ゆ」を含む表現が省略されていると見られる)。これらはXとYをただ並べたものである。(10)でいえば、YとXが同一表現内で隣どうしに並んでいるという状況や、鶴鶴や千鳥が鋭い目の形をしているという読み手に共通した知識など、外部的な条件がこの比喩を比喩として成立させている。そのため、鶴鶴や千鳥を見たことがない人には、全体の歌意はもちろんのこと、この歌に比喩が用いられているということ自体が理解しにくい。(11)(13)は体言「沖つ鳥・一本薄」と用言「胸見る・項傾し」の組み合わせである。枕詞や序詞として分類されることの多いこれらも、構造は(10)と同様、へ喩えるものゝとへ喩えられるものゝをただ並べ置いたものである。(12)のように本題であるXがYより先行する例も少数ながら見られる。このように、原始的な比喩の形式の一つに、へ喩えられるものX(＝本題)ゝとへ喩えるものYゝをむき出しのまま並記する方法があったと推測される。それに

現代語の文法を当てはめて、「あめ鶴鶴千鳥真鳩」は体言「利目」にかかっているため連体格であり、「沖つ鳥」は用言「胸見る」にかかっているため連用格である、と理解するのは適切ではないだろう。

同様のことがへーゴト(シ)の原初段階にも当てはまると推測される。へーゴト(シ)のゴトに名詞「事」の性質が色濃く残存していた当初、「X」と「Yノ事」はむき出しのまま「X」―「Yノ事」または「Yノ事」―「X」のように並記されていたと推測される。Yの方が比喩の対象であるへ諭えるものであることを、対象化する働きをもつ名詞「事」が知らせるため、Xの方がへ諭えられるものすなわち本題であるということを、外部の条件に頼ることなく理解することができる。まだ直喩とは呼びがたいこの段階においてすでに、(10)―(13)のようにただ並べ置いた比喩の形式よりも、比喩であることを明示する力が高い。つまり、へーゴト(シ)の原初段階であると目される「X」―「Yノ事」「Yノ事」―「X」は、(10)―(13)のようなへ諭えられるものへとへ諭えるものへをむき出しのまま併記するという形式を踏まえながらも、比喩として一段進んだ形式であったと考えられる。さらに、本題Xは多くの場合「主語x―述語x」で表される出来事であり、Yも時として「主語y―述語y」の形をとる。すると、次のような形になったであろう。

- (イ) 「主語y―述語y」ノ事 ― 「主語x―述語x」
- (ロ) 「主語x―述語x」 ― 「主語y―述語y」ノ事
- (ハ) 「主語x ― 「主語y―述語y」ノ事」 ― 述語x

現代語の文法からすると、(イ)―(ハ)は文であり、「(主語y―述語y)ノ事」は従属節として述語xを連用修飾する連用格と位置づけることになる。しかし、これらはへ比較するものへとへ比較されるもの(＝本題)をただ並べ置いたものであり、(10)―(13)と軌を一にするものであろう。(イ)―(ハ)の形式はやがて次のような例につながっていったと考えられる。

- (14) (15)はへーゴト(シ)の語幹用法でありながらゴトが述格
- (14) (15)はへーゴト(シ)の語幹用法でありながらゴトが述格
- (16) (17)はへーゴト(シ)の語幹用法でありながらゴトが述格
- (17) 渡る日97の 暮れぬ98がこと 晩去之如99 照る月の 雲隠れ100こと 沖つ藻の なびきし妹
- は もみち葉の x過ぎて去にきと…(2) (2) (イ)
- 【主語y―述語y】ガ事 ― 「主語x―述語x」
- (18) 古りにし101姫にしてやかくばかり恋に沈まむ102手童のこと
- 【如手童児】 (2) (ロ) 【主語x―述語x】―「Yノ事」
- (19) x締めなき 布肩衣の y海松のこと 【美留乃其等】
- わわけ下103がれる…(5) (ハ) 【主語x―「Yノ事」―述語x】

に立つ珍しい例としてしばしば挙げられる。これは「主語 X—述語 x」が名詞節となつて「述語 x スル主語 x」という体言 X に変わったために、結果的に「[X]—[Yノ事]」という古い比喩の形をとることになり、コト(事・言)の名詞としての働きが立ち現れて体言止めとして述格に立つたものと考えられる。以上から、形容詞語尾シを獲得する以前の形と見られるへゝゴト(シ)の語幹用法は、専ら連用格で用いられているというよりも、へ喩えるものゝとへ喩えられるものゝをむき出しのまま並記するという原始的な比喩のあり方に現代語の文法を当てはめると、連用格に見えがちであると理解するのが適當であろう。

#### 四 まとめ

上代における直喩の様相を捉えるために、まず本稿ではへゝゴト(シ)を取り上げ、その成り立ちと仕組みを考察した。述べてきたように、最も原初的な段階ではへ喩えられるもの X(=本題)とへ喩えるもの Y をむき出しのまま並べ置き、「[X]—[Y]」または「[Y]—[X]」という形式で比喩を成立させていたと考えられる。やがてへ喩えるもの Y の方を抽象名詞コト(事・言)でひとくくりに対象化するようになり、「[X]—[Y(ノ)コト]」または「[Y(ノ)コト]—[X]」の形式で比喩を成立させる段階へと進んでいったと考えられる。これは X と Y をむき出しのまま併記する原初形式を踏まえながらも、Y の方がへ喩えるものゝであることが明らかな形式

であることから、比喩としての明示力が高まった一段進んだ比喩の形式であったと推測される。こうしたコトがやがて付属語化するとともに連濁し、さらに形容詞語尾シを獲得してへゝゴト(シ)になつたものであろう。このようなへゝゴト(シ)と、上代で直喩をつくるもう一つの代表へゝナスゝがどのように関わっているのかについては、稿を改めたい。

#### 注

\* (一) 本文の引用は、万葉集：新編日本古典文学全集『万葉集』小学館(一九九四)、古事記：新編日本古典文学全集『古事記』(一九九七)、に従う。歌番号は引用した本に従う。書名を添えない番号は万葉集のもので、巻六・一六七九番を(6.679)と表す。

\* (二) へゝゴト(シ)の詳しい研究史については、本文で紹介した吉田金彦(一九七三)と山口佳紀(一九八二)を参照されたい。なお、山口佳紀(一九八二)はへゝゴト(シ)のゴトはカタ(形)の母音交替形であるとする新たな語源説を提出している。中古の和文において直喩をつくるへゝヤウナリゝのヤウ(様)が「様子」の意であることから、ゴト(如)も「本来は「様子」の義であったと見る方が分かりやす」と述べ、ゴトと昔の交代として問題のないカタ(形)をへゝゴト(シ)の源としている。しかし、直喩に通じる用いられた方をしたカタ(形)の例が見あたらず、また後述するように原始的な比喩のあり方が残存していると考えられるへゝゴト(シ)の源が「様子」という「抽象度の高い」意味の語であつ



たとは想像しにくい。

## \* (三)

橋本進吉(一九五一)『上代語の研究』は、橋本進吉(一九四〇)『ことさげば』の『こと』と如の『こと』、『国語と国文学』17巻10号、昭15・10)、橋本進吉(一九四一)『ことさげば』の『こと』の語義について、『国語と国文学』18巻112号、昭16・1112)等を所収している。

## \* (四)

引用に用いた新編日本古典文学全集『古事記』では、この『こと』に「言」をあてているが、この『こと』が「事」なのか「言」なのかについては問わない。周知のように、上代において両者は分かちがたい。

## \* (五)

(7)(8)のような(参照)の(ゴト)にも同様のことが当てはまる。比喩とは異なる二つの事物を照らし合わせて共通点を見つけることであるため、(喩えるもの)と(喩えられるもの(=本題))の関係は、(比較するもの)と(比較されるもの(=本題))というより大きな関係の中に含まれている。「事・言」のもつ対象化する働きは、比喩だけでなく広く比較参照の対象を示す働きであったと推測される。例えば、(7)では前評判と実景を比較し、それが共通していたことを表していることと見ることができる。つまり、本題すなわち(比較されるもの)である実景に対して、前評判が(比較するもの)であることをゴトが知らせていると言える。これは(5)(6)のゴト、ひいては(9)のゴトに通じる働きであろう。

(むらしま さちこ・文学部兼任講師)